

序 (『下諏訪町誌』(中巻)増補
改定版の刊行を祝して)

下 諏 訪 町 長 高 木 清 允

序 (『下諏訪町誌』(中巻)増補
改定版の刊行に当たって)

下 諏 訪 町 増 補 版 編 纂 審 議 会 ・ 会 長 新 村 益 雄
下 諏 訪 町 助 役 新 村 益 雄

原 版 の 序

下 諏 訪 町 誌 編 纂 委 員 長 黒 田 新 一 郎

第 六 編 近 世 の 下 諏 訪

今 井 廣 亀

は じ め に

三 五

時 代 区 分 (三 五)

前 期 (三 六)

中 期 (三 七)

宝 曆 の 夜 明 け (三 八)

後 期 付 末 期 (三 九)

凡 例 を 兼 ね て (四 一)

中 世 末 の 下 諏 訪

四 四

下 ノ 諏 訪 (四 四)

他 の 村 町 (四 六)

関 東 転 封 (四 九)

日 根 野 高 吉 (四 九)

太 閤 検 地 (五 〇)

逃 散 民 (五 〇)

第 一 章 近 世 封 建 社 会 の 成 立

五 二

第 一 節 高 島 藩 の 成 立

五 二

御 巡 見 (五 三)

第 二 節 藩 土

五 四

給 地 (五 五)

第三節 検地

地方算法記(六三)

検地の実際(六六)

五五

第四節 法制の整備

御蔵方御張紙(六八)

郡中法度(六八)

高札(六九)

五人組法度(七六)

六八

罰則(七九)

第五節 宗門改と人別改

宗門廻村(八九)

鉄砲改(九〇)

八一

第六節 治安と風儀

火の用心(九七)

風儀(九七)

為人録(九七)

博奕(九九)

九三

男女の風儀(九九)

儉約令(九九)

第七節 藩政改革

いくつもの改革(一〇二)

第八節 お目見え・苗字・帯刀・御扶持その他

第九節 散居武士

第二章 近世村落の組織と運営

第一節 村高

東山田村高(一一五)

下ノ原村高(一二二)

友之町高(一二七)

三が一(一三二)

一一五

一一五

一〇八

一〇五

一〇一

戸 川(一三二) 湯之町高(一三三) 富部村高(一三四) 高木村高(一三七)

久保村高(一四〇) 武居村高(一四二) 林検地(一四三)

第二節 耕地の拡張と移動 一四五

土地の売買・質入れ(一四五) 地主と持高(一四八) 地主と小作(一五一)

第三節 貢 租 一五三

定免 法(一五三) 大 検 見(一五六) 高 割(一五八) 御 借 用(一六一)

小物 成(一六二) 出 入(一六三) 追 鳥(一六六) 徳帳(斗貢帳)(一六七)

未進(滞納)(一七〇) 高掛けの冥加(一七二) 運 上(一七二) お蔵(郷蔵)(一七三)

第四節 新田や汐の開發 一七四

萩倉新田(一七四) 蝶ガ沢の開發(一八二) 土波止新田(一八三) 土橋源蔵(一八七)

町人請負新田(一八七) 土橋兵四郎(一九〇) 戸 川 筋(一九二) 梨 子(一九二)

水 車(一九三) 村 定(一九三) 道勇館と開拓記念碑(一九六)

菰川 汐(一九九) 五兵衛汐(二〇四) 高 木 汐(二〇五) 八島の水溜池(二〇七)

第五節 村という共同体 二〇八

本百 姓(二〇九) 五 人 組(二一〇) 村 役 人(二二二) 名 主(二二三)

年 寄(二二五) 百 姓 代(二二六) 古 役(二二六) 世 話 役(二二六)

郷 田(二二七) 講 田(二三二) 村 林(二三二) 村 定 め(二三三)

歩 割(二四八)

第六節 小前層の抬頭

一五二

大前と小前(二五二) 役

論(二五五)

下ノ諏訪宿役論(二五六)

萩倉新田地図争い(二六一)

第三章 農業と余業

二七五

第一節 農業

二七五

稲 作(二七五) 肥 料(二七八) 石 灰(二七九) 耕作と農具(二八二)

その他の作物(二八四) 冬稼ぎ山仕事(二八四) 篤 竹(二八五) 山田莫産(二八六)

第二節 入会論争

二八七

東山田村と西山田村の境論(二八八) 武居入草場(二九〇) 大鹿山入会(二九一)

武居入御林(二九二) 宝曆の東山田村山論(二九三) 文化の戸沢山山論(二九四)

樋橋の草場(二九五)

第三節 輸送業

二九六

中馬(仲馬)(二九六) 中馬追いと中馬総代(三〇一)

第四節 繊維業その他

三〇二

綿打ち(三〇二) 小倉織(三〇九) 小倉屋伊左エ門(三一一〇) 高島藩の奨励策(三一二)

黒田可久(清兵衛)(三二四) 養 蚕(三二六) 桑(三三五) 生 糸(三三九)

開港と生糸(三四四) 藩の勸業(三五二) 物価騰貴(三五二) 漁業(三五二)

商業(三五六) 焼酎とり(三六一) 出稼(三六一) 水車(三六五)

第四章 下ノ諏訪宿

第一節 中山道と甲州道中

中山道(三六六) 甲州道中(三六七) 一里塚と並木(三六七) 一里塚後日談(三七二)

和田峠(三七二) 石小屋(三七四) 久保村市五郎(三七九) 雪割人足(三八一)

道橋の管理(三八二)

第二節 下ノ諏訪宿

宿の成立(三八三) 下ノ諏訪宿定(三八四) 宿の構成(三八八) 高札場(三九〇)

水系(三九二) 問屋場(三九二) 問屋場役人(三九四) 下ノ諏訪宿問屋(三九八)

小口弥右エ門(三九九) 岩波太左エ門(四〇〇) 宿役給米(四〇三) 下問屋(四〇五)

第三節 伝馬

伝馬(四〇七) お定人馬(四一二) 日メ帳(四一七) 先触れ(四一八)

伝馬宿と加宿(四二〇) 三が一(四二二) 加宿(四二三) 伝馬の賃銭(四二六)

刎銭(四二九) 助郷(四三三) 正人馬(四三八) 余り人馬(四三九)

助郷惣代(四四〇) 伝馬請負(四四〇) 伝馬平均(四四八) 宿駅の難渋(四五〇)

助郷の難渋(四五二)

第四節 休泊の施設

四五五

本陣(四五五)

脇本陣(四五六)

御茶屋(御腰掛)(四五九)

旅籠屋(四六一)

本質宿(四六六)

茶屋(四六八)

樋橋村と餅屋村(四六八)

口留番所(四七四)

宿場のにぎわい(四七六)

遊女・飯売女(四七八)

第五節 名士の紀行

四九一

『岐蘇(木曾)路の記』(四九一)

『壬戌紀行』(四九三)

『旅賀羅寿』(四九三)

『金の草鞋』(四九四)

『木曾路名所図絵』(四九六)

第六節 身分あるお通り

四九六

盛砂(四九六)

大名の通行(四九七)

老中の通行(五〇四)

お茶壺道中(五〇五)

日光例幣使(五〇八)

姫君のお通り(五一一)

寿明宮(五一五)

和宮(五一七)

會計(五四五)

大名妻子の帰国(五四九)

第七節 庶民の旅

五五〇

浪花講(五五三)

接待(五五六)

行倒人・行路病者(五五七)

第五章 下ノ諏訪温泉

五五九

湯之町(五五九)

綿之湯(五五九)

小湯(五六九)

旦過の湯(五七四)

第六章 災害

五八〇

震災(五八〇)

凶

作(五八二)

川荒れ(五八五)

五八六

第七章 庶民の生活

第一節 家と相続

五八六

第二節 衣食住

五八六

住 居(五九〇)

食(五九四)

衣(五九七)

五九〇

第三節 信仰

六〇〇

諏訪明神(六〇一)

その他の神社(六〇二)

杉の木明神(六〇三)

米守神社(六〇四)

祝神(祝殿)(六〇四)

仏 教(六〇五)

下社神宮寺(六〇五)

和光山観照寺(六一〇)

三精寺(六一一)

白華山慈雲寺(六一一)

禁 制(六一七)

触 頭(六一九)

来迎寺(六二一)

法 泉 寺(六二五)

念仏徳本(六二七)

萩倉薬師(六三一)

修験道(六三二)

御嶽講駒ガ嶽講(六三三)

吉 寿 院(六三四)

大城院(六三五)

管 (六三八)

宝 光 院(六三九)

醍醐派分教会(六四四)

行 屋(六四五)

いろいろの講(六四七)

東山田村(六四八)

下ノ原村(六四九)

湯之町(六五三)

友之町(六五四)

富部村久保・武居村(六五五)

高木村(六五七)

萩倉新田(六五八)

樋橋村(六五八)

巡 礼(六五九)

口碑に残る人々(六五九)

伐木講(六六一)

第四節 娯楽

六六三

若者仲間(六六四)

第八章 学問芸術

六六六

第一節 藩主忠晴の詩

六六六

逍遙亭(六六六)

第二節 天龍道人の詩・書・画

六七一

略 伝(六七二) 絵 画(六七九) 詩(六八〇)

書(六八二)

鉄 筆(六八二)

第三節 和歌

六八二

第四節 松島北渚の文

六八七

第五節 寺子屋

六八九

第六節 河西幸四郎と山田商山

六九三

啓徳会(六九六)

第七節 建築

六九七

諏訪下社春宮下馬橋(六九七) 諏訪下社御造営(六九七)

三井伝左衛門(六九九)

慈雲寺山門(七〇〇)

東山田村熊野社本殿(七〇〇)

諏訪下社春宮拜幣殿(七〇三)

諏訪下社秋宮拜幣殿(七〇五)

諏訪下社秋宮神楽殿(七〇九)

立木音四郎(七一二)

旧本陣遺構(七一二)

第八節 木喰五行上人の彫刻

七一四

武居薬師堂の諸仏(七一八)

第九節 石の造形品

七一九

春宮の石鳥居(七一九) 大門先の石燈籠(七二〇) 龍の口(七二二) 地藏尊と思惟仏(七二二)

家形の塔(七二四) 石 碑(七二五) 十王像(七二五) 道 祖 神(七二七)

第九章 近世社会の崩壊

七二九

——幕末の混乱——

第一節 藩士の貧窮と町村の疲弊

七二九

第二節 和田嶺合戦 砥沢口合戦(樋橋戦争)

七三五

水戸浪士(七三五) 高島藩の防戦(七三八) 武田方の迂回作戦(七四六) 追い討ち(七四八)

戦後のしまつ(七四九) 損害補償(七五一) その後の浪士(七五一) 追討軍(七五二)

戦いの教えたもの(七五三) 草 莽(七五四) その後の祭事(七五四)

第三節 賈勅使高松殿

七五六

第四節 相楽総三と赤報隊

七五六

相楽総三の生い立ち(七五七) 下ノ諏訪入り(七六一) 赤報隊総捕縛(七六七)

魁 塚(七七二)

第五節 石城東山

七七四

第六節 おかげ祭・おかげ参り

七七七

第七節 御一新

七八〇

新しい高札(七八一) 高島城破却(七八四) 神仏分離(七八四) 神仏習合のすがた(七八四)

犬射馬場(七八五) 神領知行(七八七) 社人と社僧(七八八) 除 仏(七八九)

社僧の復飾(七九〇)

第一〇章 むすび

七九二

——青い目にうつつた下ノ諏訪——

あとに

七九九

原版の編集後記

下諏訪町誌編纂委員会・専任委員 山田 仁 八〇一

増訂版の編集後記

下諏訪町誌増補版編纂審議会・専任委員 田中 薫 八〇五